此の點は「正しく主君」と同樣、無智から來た誤謬と類推して然るべきであらう。

前進座は夙に歌舞伎の再檢討を志してゐるらしい。而して古典の再檢討はリアリズムの線に沿つて、それを見るの他はあり得ない。而して勸進帳の場合はそれは失敗してゐる。然るに、以上私の所說の如く、再檢討の途は存するのである。蓋し、リアリズムとは演技の形式如何に在るのではなくて、演技の方向如何に在るのであるから。私は今回の勸進帳に前進座の藝術的限界を見たくない。

最後に、「若き啄木」の成功を祝したい。これを主觀的な演技の、新築地の連中が上演すると聞いて懸念してゐたが、新協劇團と共に最も信賴すべき劇團、前進座の手に依つて上演せられた事は幸福である。啄木の小說から取つた第二幕等は戲畫化せられずして幸ひであつた。詳評は茲には避けるが、瓢右衞門、進藏、小俳優諸氏の成功を特に讃えたい。

うそくらぶ

先に各新聞紙に報道せられたる如く、歌舞伎十八番「勸進帳」に改訂を施した德富蘇峰氏は、今般更に引續き「古事記」「萬葉集」「源氏物語」等の古典に、改訂の筆を振ふ事に決定した。